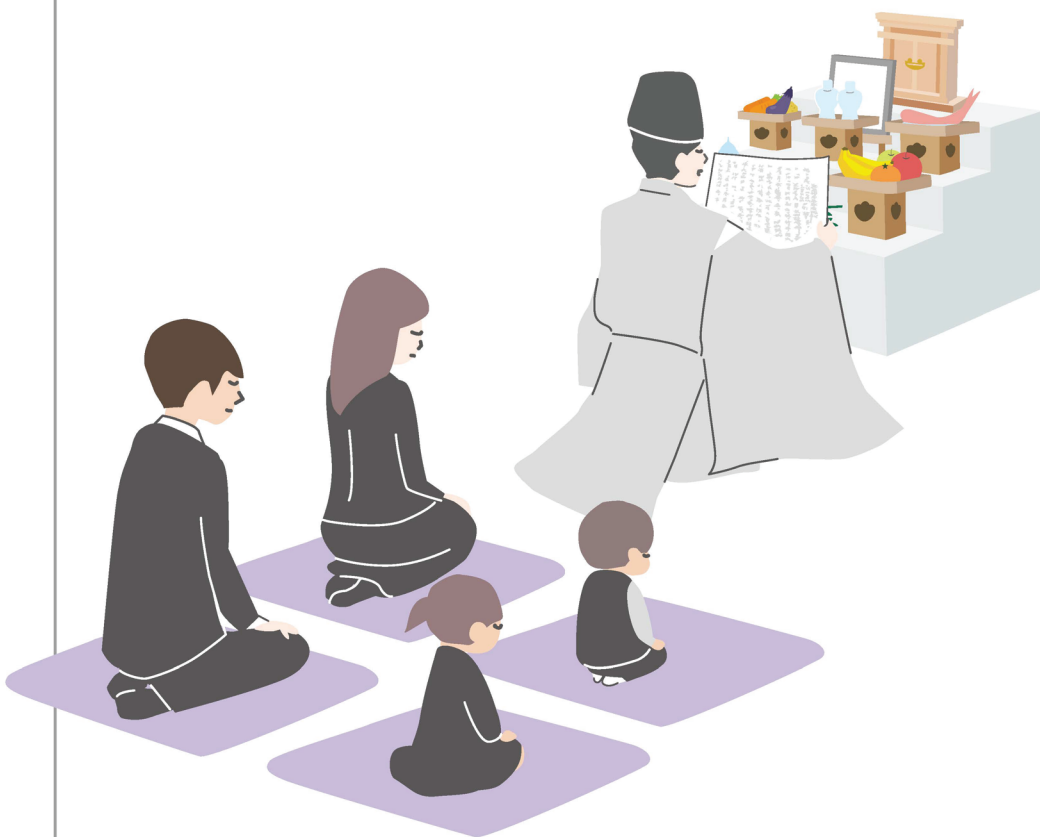


神葬祭

神道のお葬式



神葬祭についての詳細は、神社本庁のホームページもご覧ください。



神社本庁
(<https://www.jinjahoncho.or.jp>)

令和7年4月初版 発行／神社本庁
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1丁目1番2号

「御霊」のゆくえ

人が亡くなると、故人の御霊はどこに行くのでしょうか。

これは日本人が古の時から今日にいたるまで、抱いてきた問いです。神話の中では高天原、黄泉の国、根の国など、さまざまな表現で語られてきました。

例えば御霊は遠いどこかに行くのではなく、ただそばにとどまり続けると考えられるのが幽世です。故人の御霊は私たちが会いたいと願うとき、いつでも来てくれるものだという、やさしくあたたかな捉え方です。

幽世は私たちのふるさとと生活とに繋がるところ。故人の御霊はいつでも私たちのそばにあり、子孫の暮らしを見守っているのです。ですから神道では故人が亡くなったことを「帰幽」といいます。

神葬祭の意味や儀礼を知ること、御霊のあるところに思いを致しましょう。



神葬祭

私たち命あるものは何人といえども死を免れることはできません。肉親の死などに直面した時、私たちは悲しみの中、故人を見送りますが、その際さまざまな儀式を行います。いうまでもなく仏教には仏教式の、キリスト教にはキリスト教式の葬儀があります。神葬祭は神道の儀礼にのっとった葬儀で、日本固有の葬法を土台に整えられたものです。

神葬祭の特徴は、

- 厳かで慎み深く簡素である
- さまざまな制約が少なく、経済的負担が軽い
- 地域の氏神さまとの関わりをもてる
- 子孫や地域の方にも思いを引き継げる

などがあげられます。

初宮参り、七五三、季節行事など、人生のさまざまな場面で関わりがあった氏神さまの神職に神葬祭を行っていただくことで、故人にとっての人生儀礼の最後を締めくくりましょう。



神葬祭のながれ

※葬儀は地域差がありますので、次第や内容について説明やイラストと異なる場合があります。

喪主は葬儀の日程を決め、次いで神職に葬儀を依頼し、火葬や埋葬に伴う手続きを行います。

帰幽奉告・枕直しの儀

神葬祭は、氏神様に故人が亡くなった旨を報告することから始まります。家庭の神棚に奉告し、神棚の前面に白紙（半紙）を貼ります。これは遺族が故人のおまつりに専念するためなどの理由があります。故人を北枕にして顔を白布で覆い、枕元に枕屏風を立て、守り刀を胸元または枕下に置きます。



神葬祭本儀 (1日目)

通夜祭・遷霊祭

通夜祭では、家族や生前親しかった人が集まり、夜通し故人を偲びます。本来、通夜祭は故人の蘇りを祈るものでした。かつて酒宴を設ける地方があったのも、故人とともに食事をするので、御霊を遺体に引き戻そうとしたからです。

通夜祭の後、故人の御霊を遷霊に遷し鎮める遷霊祭を行います。

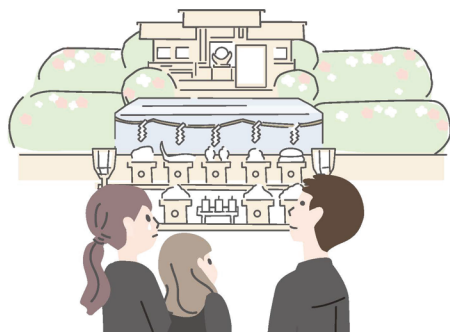


神葬祭本儀 (2日目)

葬場祭 (告別式)

故人との最後のお別れを行う儀式です。

柩前の祭壇を飾りつけ、酒饌をお供えし、斎主（神職）が故人の人柄や経歴、功績をたたえ、今後は祖先の霊とともに喪家と遺族を見守ってくれるようにとの願いを込めた祭詞を奏上します。最後に参列者、会葬者が一人一人玉串拝礼をして故人との訣別を行い退出します。肉親や近親者は、安らかな死後を祈って対面した後、霊柩を奉じ、葬列をととのえて火葬場へと向かいます。

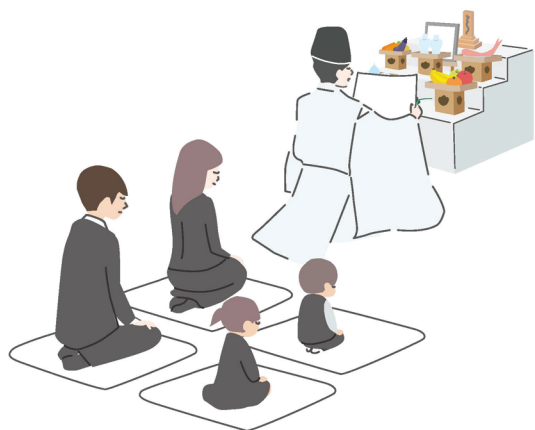


神葬祭後儀

「みたままつり」(霊前祭と式年祭)

霊前祭は、帰幽の日から十日目ごとに行うおまつりです。特に十日祭や五十日祭（仏教の四十九日に相当）には、家族や親族が集まり故人を偲びます。この五十日祭を済ますと忌明けとなり、神棚のおまつりを再開します。

その後、百日祭を行い、以降は一年祭、三年祭、五年祭、十年祭と節目ごとに墓前や御霊舎に親族が集い、神職が祭詞を奏上し式年祭を行い故人を偲びます。



霊璽

「れいじ」

霊璽は、故人の御霊を宿すもので、仏教の位牌にあたります。その形には種類がありますが、一般には位牌の形に似た白木のもが多く、名称も木主、霊主などという呼び方をされることもあります。

霊璽の表面には故人の霊号、裏面には帰幽の年月日、享年などが墨書されます。霊号は故人の名前の下に「〃命」「〃之霊」「〃霊位」などがつけられ、特に男性なら「〃大人之命」「〃彦之命」、女性なら「〃刀自之命」「〃姫之命」などと加えることもあります。

神葬祭の通夜祭に続く遷霊祭で、故人の御霊をこの霊璽に遷し留めます。そして霊璽はしばらく仮の御霊舎に安置され、五十日祭や百日祭の後、故人の霊を祖先の御霊と同様におまつりするために仮御霊舎から御霊舎に遷し、永く家の守護神としてお祀りします。



霊璽は神聖な御霊の依り代のため、
霊璽には覆いを被せることもあります。



裏

帰幽の年月日と
年齢が記される。



表

姓名に「〃命」や「〃之霊」
などをつけた霊号が記される。

御霊舎

「みたまや」

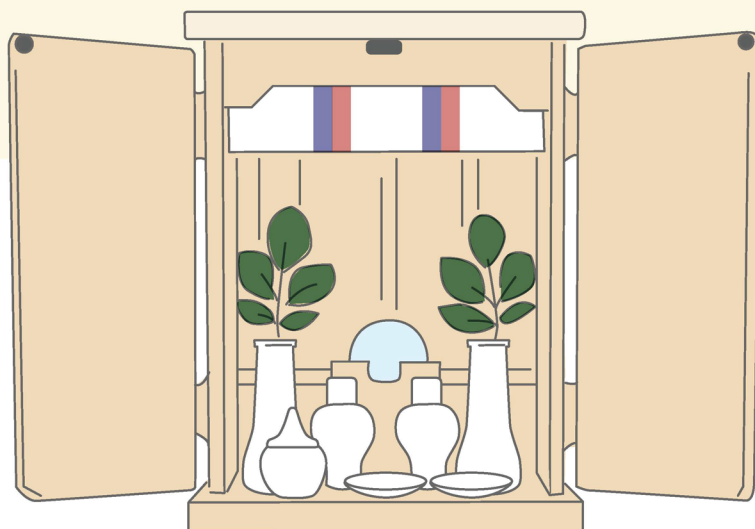
先祖代々のおまつりは、神棚とは別に御霊舎をしつらえて行います。御霊舎は仏教でいう仏壇と同じようなもので、先祖代々の御霊を遷した霊璽を納めまつります。一般的に御霊舎は神棚と同じ場所にせず、神棚より少し下げて設けます。

御霊舎をおまつりする場合には近くの氏神さまの神職に相談してお祓いしましょう。

御霊舎の中には父母、祖父母、曾祖父母（あるいは高祖父母）などの霊璽を並べておまつりします。

又、古くなった順で御檯（霊璽を入れる箱）に納め、年祭の都度取り出すようにします。

御霊舎が狭い場合には御檯の内に重ねて入れ、該当のおまつりの日にはその方の霊璽を取り出して前に立てます。



霊璽は御霊舎の中扉の中に安置します。
そして中扉は閉めて、その前に神鏡を置きます。

服忌について

服忌とは、親族が亡くなった際に哀悼の意を表し、祭りに専念する期間を指します。

服

…故人への哀悼を表す期間

忌

…故人を偲び、祭りに専念する期間

服忌の期間

かつての「服忌令」では、服忌の期間が明確に定められており、最長は父母の場合で忌が50日、服が13カ月とされていました。現在では地域の慣習に従うことが一般的で、多くの場合、忌は五十日祭まで、服は一年祭（一周忌）までとされています。

神道と仏教

日本の葬儀文化の変遷



現在、日本で行われる葬儀の多くは仏式ですが、もともと日本には仏教伝来以前からの固有の信仰に基づく葬儀が存在していました。

しかし、七〇二年に持統天皇の葬儀が仏式で行われたのをきっかけに、その後の天皇の葬儀にも仏教が取り入れられました。中世以降、仏教の隆盛とともに仏式の葬儀は公家や武士の間にも広まり、江戸時代には寺請制度の導入で一般庶民にも定着しました。

一方、江戸時代中期頃から日本古来の葬儀のあり方を見直す動きが始まり、明治時代には神道式の葬儀が公式に認められるようになりました。

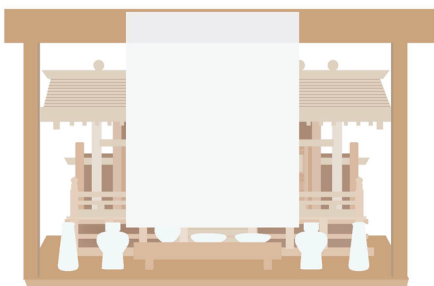
神葬祭は、日本固有の葬儀を基盤に整理された儀式で、厳かで儀礼がわかりやすく、また質素な特徴があります。このため、近年では増加傾向にあります。

服忌中の神社参拝

忌の期間中は、神社の参拝を控えましょう。やむを得ず参拝する場合には、お祓いを受けてから参拝しましょう。

服忌中の家庭のお祀り

忌の期間中は、神棚の前面に白紙（半紙）を貼り、お祀りを控えます。服忌中に新年を迎えることになった際に、新しいお神札を受けることを控える方もいますが、神棚のお神札は毎年新しいものに取り替えるのが習わしです。年末年始と忌の期間が重なった場合は、忌明け後に新しいお神札を受けてお祀りしましょう。



神道と仏教 用語の比較

神式と仏式では、儀式の内容は似ていても、名称が異なることが多くあります。ここではよく使われる用語を紹介します。

神道		仏教	
年祭・式年祭	▼	法事	
十日祭	▼	初七日	
五十日祭	▼	四十九日	
百日祭	▼	百か日	
一年祭	▼	一周忌	
三年祭	▼	三回忌	
五年祭	▼	七回忌	
十年祭	▼	十三回忌	
三十年祭	▼	三十三回忌	
五十年祭※	▼	五十回忌	

※ 帰幽から五十年が経つと「祭り上げ（弔い上げ）」となり、亡くなった方の御霊は清められて、祖先と一体となるとも考えられています。

知っておきたい神葬祭のマナー

神葬祭には、仏式の葬儀とは異なる独自のマナーがあります。突然の訃報に動揺しないよう、基本的なマナーを事前に理解しておくことが大切です。

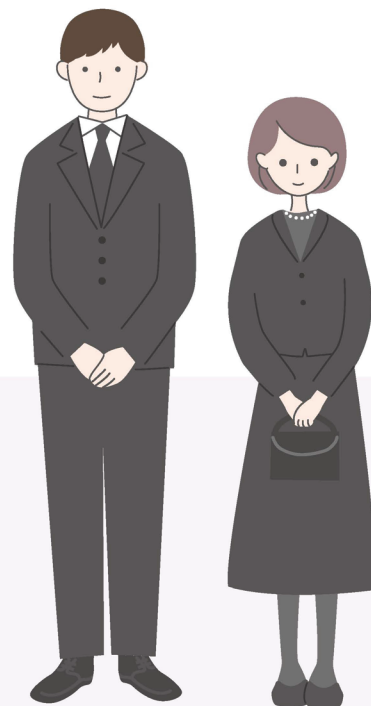
神式の葬儀では、通夜祭や葬場祭（告別式）、霊前祭、年祭などの儀式が執り行われます。参列時の服装や作法については、以下の内容を参考にしてください。

服装

通夜祭…急いで弔問に訪れたという気持ちを表すために喪服ではなく、地味な色の平服（スーツ）の着用が本来のマナーですが、告別式に参列できず通夜祭のみの場合は喪服を着用することもあります。

葬場祭（告別式）…喪服で参列しましょう。

霊前祭・年祭…一年祭までは喪服の着用が基本ですが、それ以降は地味な色の平服を着用しましょう。



喪服

男性：略礼服、色無地の羽織袴など。
女性：黒のワンピースやスーツ、黒無地の和装など。
子供：制服、もしくは白地のシャツに黒・紺・グレーなどのズボンやスカート。

ネクタイや靴やバッグは黒のものを着用します。数珠は使用しません。

お包み

白黒の水引を使用し、表書きには「玉串料」または「御霊前」と書きます。たたみ方は、上側の折り返しを上に乗ねます。これは、悲しみで目を伏せた状態を表しています。また、年祭に参列する際のお包みも、「玉串料」と書きます。なお、蓮の絵のついた袋は仏式用ですので避けましょう。



裏



表

玉串拝礼の作法

1 神職から玉串を両手で受け取ります。右手で玉串の枝元を上から持ち、左手で葉の部分を下から支えるように持ちます。



枝元を神前に向ける

2 玉串を置く台の三步手前まで進み小さく一礼し、その後、台の前まで進んで深く礼をします。

3 玉串を時計回りに回し葉先を立てたら、祈念をこめます。枝元を御神前に向けて玉串を静かに置きます。



4 二拝（二回おじぎ）し、忍び手（音がしないように手を打つ）で二回拍手をします。最後に一拝して下がります。



手水の作法

葬儀場に入る前に、身を清めるために行う神道の儀式です。ひしゃくで水をすくい、左手、右手にかけた後、口をすすぎます。最後に左手をもう一度清め、口と手を拭きます。



手を打つ時に音を出さない

神社本庁のHPで「手水」や「玉串拝礼」の詳しい作法を、動画とともに紹介しています。

